「森の芸術祭　晴れの国・岡山」

FOREST FESTIVAL OF THE ARTS OKAYAMA:
CLEAR-SKIES COUNTRY

実施計画

「森の芸術祭　晴れの国・岡山」実行委員会

令和５年１０月３０日

目次

1　開催趣旨……3
2　芸術祭コンセプト……4
3　開催概要……5
　（1）　名称……5
　（2）　会期……5
　（3）　開催エリア……5
　（4）　主催……5
　（5）　アートディレクター……6
　（6）　ロゴマーク……7
4　プロジェクトの構成……8
5　展覧会内容……10
　（1）　展覧会概要……10
　（2）　各エリアの特色と作品設置会場……11
　（3）　参加アーティスト……17
6　広報……25
　（1）　方針……25
　（2）　取組内容……25
7　受入環境の整備……27
　（1）方針……27
　（2）取組内容……27
8　来場者への情報提供……29
　（1）方針……29
　（2）取組内容……29
9　観光・文化関連イベント……30
　（1）方針……30
　（2）取組内容……30
10　地域交流・学校連携……31
　（1）方針……31
　（2）取組内容……31
11　サポートスタッフ……32
　（1）方針……32
　（2）取組内容……32

12　企業協力・協賛 33
（1）方針 33
（2）取組内容 33
13　鑑賞券・オフィシャルグッズの展開 34
（1）方針 34
（2）取組内容 34
14　スケジュール概要 35

1　開催趣旨

岡山県北部には、中国山地の雄大な自然、旧街道の宿場町や城下町として栄えた歴史ある街並み、古くから受け継がれた伝統芸能、多彩な農産物など、瀬戸内海沿岸部とは異なる風景、文化、魅力的な地域資源が数多くあります。

これらの地域の魅力をこれまで以上に広く認知してもらうため、私たちは新たな切り口として「アート」が秘める大きな力に注目しました。

近年、全国各地で芸術祭が盛り上がりを見せており、県北部においても、美作三湯芸術温度など、アートを基軸とした地域活性化の取り組みが広がっています。アートには、新たな視点で地域の魅力を引き出し、地域を元気にする力があります。

こうした力を活用し、国際芸術祭「森の芸術祭　晴れの国・岡山」の開催をきっかけとして、県北部の魅力を国内外に広く発信し、訪れた方に特別な体験を提供したいと考えています。

本芸術祭では、国境、人種、性別等の垣根を越えた、多様なアーティストの作品に出会うことができます。さらに、作品を通じて、作者の感性やメッセージに触れることで、自身の想像力を刺激し、新たな価値観が生まれ、芸術文化の素晴らしさに気づくことができます。このような特別な体験は、訪れた方にとって大きな財産になると同時に、舞台である県北部は、素晴らしい思い出の地として刻まれるでしょう。

また、アート作品を核に、観光資源との周遊も生まれ、地域全体の観光消費拡大と交流人口の増加に繋がるものと考えています。

地域の方々にとっても、アーティストや観光客との非日常的なふれあいは、地域の潜在的な魅力を再認識し、より一層、地域を誇りに感じるきっかけになると確信しています。

「森の芸術祭　晴れの国・岡山」が、岡山ならでは、県北部ならではの国際芸術祭として、観光振興、文化振興、そして地域振興の新たな起点となるよう、県全体で取り組んでいきます。

2　芸術祭コンセプト

古代より大和と出雲を結ぶ出雲街道が東西に延び、近世には城下町・宿場町として栄えたこの地には、さまざまな伝統建築や工芸、芸能などのレガシーが残されています。大地や森からは果物や木材などの恵みがあり、その豊かさをサスティナブルにするためのさまざまな試みがなされており、なかでも木質バイオマス発電などの森林資源を生かした取り組みは SDGs の先駆モデルとして評価されています。また蒜山高原をはじめ、美作三湯、鍾乳洞など、過度に観光地化されていない悠々とした時空間は、エコロジー思考における新しい可能性を秘めています。

森の芸術祭という名称は、温暖な気候、豊かな水や資源、食など、私たちが生きる上での大切な要素を満たしているこの地域の、自然の恵みや文化、人々が集まる場所としての多様性と豊かさを象徴する「森」からきています。

本芸術祭は、その「森」がもたらす「恵み」を芸術の力で未来に向けて活性化することを目的とし、「本当に必要な資本とは何か？」を問いかけます。美術館や記念館や学校などの文化施設、水やエネルギー、食の供給といった生活のインフラ、自然環境を共通の資本と考え、アーティストのみならず、建築家、科学者、民俗学者といった専門家も交え、地域の人々の協力を得ながら「新しい資本」をつくりあげていきます。

芸術は多様な考えを反映するとともに、これを人々に共感させ、新しい世界やものの見方に向けての想像力を養います。それは「驚き」「感動」「わくわく感」「ときめき」「生きていることの喜び」「深く感じ考えることの充足感」をもたらします。県北というひとつのエコロジーが芸術のエネルギーを得て、人々の心や感性をリフレッシュさせる「場」に変容します。晴れの国の森の住民たちの祝祭は、それを祝う祭となります。

アートディレクター　長谷川 祐子

3　開催概要

（1）名称

「森の芸術祭　晴れの国・岡山」

（英語表記）Forest Festival of the Arts Okayama: Clear-Skies Country

（2）会期

2024 年 9 月 28 日（土）～同 11 月 24 日（日）

（3）開催エリア

津山市、高梁市、新見市、真庭市、美作市、新庄村、鏡野町、勝央町、奈義町、西粟倉村、久米南町、美咲町（うちアート作品設置市町は津山市、新見市、真庭市、鏡野町、奈義町）

（4）主催

「森の芸術祭　晴れの国・岡山」実行委員会

会　　長　　伊原木隆太（岡山県知事）

副 会 長　　谷口圭三（津山市長）

〃　　戎斉（新見市長）

〃　　藤原乗将（西日本旅客鉄道（株）理事 中国統括本部岡山支社長）

顧　　問　　小倉弘行（岡山県議会議長）

アートディレクター　　長谷川祐子（金沢 21 世紀美術館館長、東京藝術大学名誉教授）

地域文化アドバイザー　　岸本和明（奈義町現代美術館館長）

太田三郎（現代美術作家）

構成団体　　岡山県、津山市、高梁市、新見市、真庭市、美作市、新庄村、鏡野町、勝央町、奈義町、西粟倉村、久米南町、美咲町、西日本旅客鉄道（株）、（公社）岡山県観光連盟、美作国観光連盟、（公社）岡山県文化連盟、岡山県教育委員会、大学コンソーシアム岡山、岡山県市長会、岡山県町村会、岡山県経済団体連絡協議会、（一社）岡山県商工会議所連合会、岡山県経営者協会、（一社）岡山経済同友会、岡山県中小企業団体中央会、岡山県商工会連合会、（公社）岡山県バス協会、（一社）岡山県タクシー協会、（一社）岡山県レンタカー協会、全日本空輸（株）岡山支店、日本航空（株）岡山支店、（一社）日本旅行業協会中四国支部岡山地区委員会、（一社）全国旅行業協会岡山県支部、岡山県旅館ホテル生活衛生同業組合

（５）アートディレクター

長谷川　祐子

金沢 21 世紀美術館 館長 ／
東京藝術大学　名誉教授
国際文化会館アートデザイン部門アドバイザー
キュレーター／美術批評。京都大学法学部卒業。東京藝術大学大学院美術研究科修士課程修了。水戸芸術館学芸員、ホイットニー美術館客員キュレーター、世田谷美術館学芸員、金沢 21 世紀美術館学芸課長及び芸術監督、東京都現代美術館チーフキュレーター及び参事を経て、2021 年 4 月から金沢 21 世紀美術館館長。文化庁長官表彰（2020 年）、フランス芸術文化勲章（2015 年）、ブラジル文化勲章（2017 年）。

主な企画展・国際展に、第 7 回イスタンブール・ビエンナーレ「エゴフーガル」（2001 年）、第 4 回上海ビエンナーレ（2002 年）、第 29 回サン・パウロ・ビエンナーレ（2010 年）、第 11 回シャルジャ・ビエンナーレ「re-emerge, toward a new cultural cartography（リ・イマージ： 新たな文化地図をもとめて）」（2013 年）、第 7 回モスクワ・ビエンナーレ「Clouds⇆Forest」（2017 年）、第 2 回タイランド・ビエンナーレ（2021 年）など。

主な著書に、『キュレーション 知と感性を揺さぶる力』（集英社）、『「なぜ？」から始める現代アート』（NHK 出版）、『破壊しに、と彼女たちは言う：柔らかに境界を横断する女性アーティストたち』（東京藝術大学出版会）、『ジャパノラマ-1970 年以降の日本の現代アート』（水声社）、『新しいエコロジーとアート-「まごつき期」としての人新世』（以文社）など。

（6）ロゴマーク

デザインコンセプト

芸術祭のビジュアル・アイデンティティは、光と影の二面性から着想を得ています。そして、新鮮で現代的な色彩を用いたメッシュ状のデザインは、地元の工房で作られた繊細な草木染の織物から着想を得ており、デザインに明るさと透明感を生み出しています。また、県北の自然を撮影した写真と組み合わせることで、芸術祭と景観との共生を表現することができます。

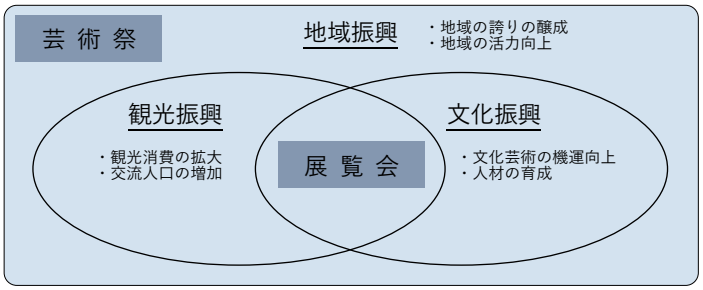
デザイナープロフィール：バーンブルック・スタジオ（イギリス）

バーンブルック・スタジオは、1990 年にジョナサン・バーンブルックによって設立されました。デザインは社会にポジティブな変化をもたらすことができると信じ、世界各地でさまざまな文化的、社会的プロジェクトに取り組んでいます。代表的な作品に、デヴィッド・ボウイのレコードジャケットがあり、彼の最後のアルバム「ブラックスター」では、グラミー賞を受賞しています。また、日本との関係も深く、東京の森美術館や六本木ヒルズのブランディングを手がけています。

4　プロジェクトの構成

本プロジェクトは展覧会を核として、観光振興と文化振興の２本の柱から構成し、県北部及び県全体の地域振興を図ります。

アーティストとの交流や多くの観光客が地域を訪れることにより、地域の方々が今まで気づかなかった地域の魅力を再認識し、地域を愛する心や誇り、いわゆるシビックプライドの醸成に繋げるとともに、開催にあたっては、地域づくりに関わる人々をはじめ、多彩な人材とも積極的に連携し、地域の活力向上を図ります。



＜観光振興＞

2020 年からの新型コロナウイルス感染症の影響により観光関連産業は深刻なダメージを受けてきましたが、観光需要は本格的な回復期を迎えています。現状の課題として、本県を訪れる観光客は交通網の充実した県南部に集中していることに加え、ポストコロナへの大きな転換期にあたり、ポストコロナ期の県北部の観光振興の施策を中・長期的な視点から実施する必要があります。

そこで、国際芸術祭という新たなコンテンツを起点に、県北部に観光客を呼び込み、既存の観光資源も最大限活用し、滞在・周遊型の観光振興を図ります。

これにより、県北部のみならず県全体の観光消費拡大及び交流人口増加に繋げることを目指します。

＜文化振興＞

県北部では、美術館等での意欲的な企画展の開催や、アーティスト・イン・レジデンスなどの多彩な取り組みにより、積極的に地域にアートを取り入れる素地ができています。加えて、近年では、美作三湯芸術温度などのアートイベントが盛り上がりを見せており、アートを活用した地域づくりへの機運が高まっています。

本芸術祭において、国内外のアーティストによる多様で質の高いアート作品に触れる機会を創出することにより、県民のアートに対する関心をさらに

高め、県北部はもとより県全体の文化芸術の機運を一層盛り上げます。併せて、多くの県民に本芸術祭に関わっていただくことにより、アートによる地域活性化に取り組む人材の育成も図っていきます。特に、大学との連携や、ワークショップ、イベントなどを通じて、学生や生徒、児童など若い世代に文化の可能性を伝え、参加してもらうことで、次世代の地域の人材の育成を図ります。

5　展覧会内容

（1）展覧会概要

本芸術祭は、国内外からアーティストや音楽家、ダンサー、建築家、デザイナー、華道家、料理シェフなど幅広いジャンルのクリエイターを迎え、新作の展示や、場所に合わせたユニークなプロジェクトを展開します。

５市町、6つのエリアの会場において展開されるプロジェクトは、場の歴史や環境を反映したもの、あるいは場を未知の想像空間に変容させるものなど多様です。この小さな旅を通して来場者に県北の魅力と未来への可能性を見たり感じたりしていただけるよう、アートの魔法の杖が活躍します。

２ヶ月間の祭の後は、一部の作品のほか、料理のレシピや協働のシステムといった形のない資本がレガシーとして残されていきます。

また、会期中には、来場者が参加できるアートイベントを市町の協力のもとに開催します。

ここにあるすべての命の営みの素晴らしさを世界とつなげ、祝福する森の祭となります。

（2）各エリアの特色と作品設置会場

津山・津山城周辺エリア

特色・コンセプト

津山市は、豊かな歴史や文化を有し、現在も県北部の中心都市です。

中心部は、江戸時代には、津山城（鶴山公園）を中心に東西に城下町が栄え、当時建てられた木造建築と、明治・大正時代に建築された欧風建築が立ち並ぶ、往時の繁栄と豊かな歴史を感じることができる場所となっています。また、1936 年に建設された旧津山扇形機関車庫や国の名勝に指定されている衆楽園なども有し、津山市の歴史や文化の集積地の一つでもあります。

このように、このエリアには、自然環境、歴史、文化等の資本が交錯して現在のかたちが形成されています。衆楽園の庭園、古い町屋、大正時代の洋館、近代の歴史としての鉄道館など、江戸時代から近代への歴史をたどる場所が、アーティストたちが紡ぐ物語によって現代によみがえります。そこには工芸や手仕事への再評価とアップデートも含まれます。

主な会場

作州民芸館

衆楽園

城西浪漫館
（中島病院旧本館）

城東むかし町家
（旧梶村邸）

津山まなびの鉄道館

PORT ART &
DESIGN TSUYAMA

津山・グリーンヒルズ津山エリア

特色・コンセプト

津山市中心地の北側に位置し、中国山地を望む丘陵地に広がる緑豊かな公園「グリーンヒルズ津山」は、25 ヘクタールの広大な敷地内に、カフェや遊歩道、フラワーガーデンなどが点在し、地域の憩いの場として広く親しまれています。公園内に立地している、ひときわ目を引くガラスドームの建築物「Globe Sports Dome」は、過去に日本建築学会賞作品賞を受賞しており、雄大な自然と、陽の光を浴びて燦然と輝く建築物とのコントラストが目を引きます。この広がりと建物のスケールを活かしたパフォーマティブなプロジェクトが展開されます。

主な会場

（未定）

奈義・奈義町現代美術館周辺エリア

特色・コンセプト

奈義町は、中国山地の秀峰「那岐山」の南麓に位置し、季節ごとに自然と調和した雄大な姿を眺めることができます。また、移住や子育てへの支援を充実させることにより、2019 年の合計特殊出生率が 2.95 と全国トップクラスであり、少子化対策の「奇跡の町」と称されています。

世界的な建築家である磯崎新氏が設計した「奈義町現代美術館」は、作品と建物が半永久的に一体化した公共建築として世界で初めての体感型美術館です。また、江戸時代から受け継がれてきた伝統芸能「横仙歌舞伎」は、年 4 回の定期公演を中心に地元に大切に守られています。

「奇跡の町」は、コミュニティ全体のユニークな意識の共有が背景にあります。それを取り込みながら、共有ヴィジョンの象徴となっている美術館や伝統芸能に新たな光を当てていきます。

主な会場

奈義町現代美術館

新見・満奇洞（まきどう）エリア

特色・コンセプト

新見市は、岡山県の北西端部、一級河川高梁川の源流に位置し、清らかな水と自然豊かな地域であり、市内の大半がカルスト台地上に位置しています。市内には複数の鍾乳洞が見られ、その一つである岡山県指定天然記念物の「満奇洞」は、歌人与謝野鉄幹・晶子夫妻が、「奇に満ちた洞」と絶賛したことから「満奇洞」と言われるようになりました。

悠久の時を経て生み出された自然の造形美は、色彩豊かにライトアップされ、幻想的な世界が広がっています。アーティストによる音と映像のインスタレーションが太古と現代を繋ぎます。

主な会場

満奇洞

真庭・蒜山エリア

特色・コンセプト

真庭市は、岡山県北部の中国山地のほぼ中央に位置し、その北部のなだらかな高原地帯に位置する蒜山地域には広大な牧草地が広がり、全国屈指のジャージー牛の飼育地域となっています。

サスティナブルの価値をより多くの人に知ってもらうための観光文化発信拠点施設「GREENable HIRUZEN」では、施設の象徴となる建築家・隈研吾氏が設計した「風の葉」をはじめ、ミュージアムやアクティビティを通じて、楽しみながら持続可能なくらしを体感できます。また、市内には、かつては使われないまま森に放置されていた木材なども活用するバイオマス発電所があり、そこで作られた電気は市の施設や地域の小中学校などで使われています。

ここでは森の資源とサスティナビリティ、共有をテーマにした作品が展示されます。

主な会場

GREENable HIRUZEN

鏡野・奥津エリア

特色・コンセプト

鏡野町は、中国山地を背景とした森林地域の豊かな自然環境に恵まれた地域です。

吉井川沿いの３キロに渡り流れる奥津渓は透明度が高い美しい水が流れ、秋は紅葉の絶景が広がり、素晴らしい渓谷美を眺めることができます。また、奥津橋のたもとで行われる「足踏み洗濯」は奥津温泉のシンボル的光景となっています。

渓谷を歩いて行くときの空間や光の変化、水や木々の表情、これにアートを足すのではなく、これらの美をより生き生きと伝える仕掛けをアーティストが提案します。

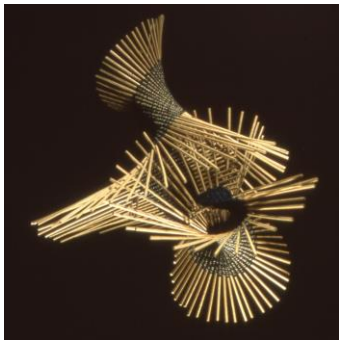
主な会場

奥津渓

（3）参加アーティスト（姓のアルファベット順）

パオラ・ベザーナ
Paola Besana

1935 年生まれ(2021 年没)。
多様な社会的・文化的文脈から発展した高度な「織り」の技術の可能性に魅せられ、「織り」の 3 次元性を探究したテキスタイル作品を制作したアーティストである。時として巨大なスケールに達したそのテキスタイル彫刻は、民衆文化と現代的な抽象美術とをひと続きの線上に位置付けている。また、自作の制作と並行して、織物工房であると同時に研究・生産・教育センターでもある「Studio di Tessitura Paola Besana（ストゥディオ・ディ・テッシトゥーラ・パオラ・ベザーナ)」を 30 年以上にわたって主宰し、スタッフのパオラ・ボンファンテ、ララ・ランツァとともに、産業用テキスタイルや建築、舞台芸術、ファッションのためのテキスタイルのデザインに取り組んだ。また、従来は技術の表現として一般的であったパターン論ではなく、技術理論に基づいた新たな教育手法も開発した。教育・研究活動と並行して、織り製品や織りサンプル、伝統的な織物やテキスタイルのライブラリーなどからなる膨大なコレクションも収集・管理した。そのコレクションは現在、「パオラ・ベザーナ・アーカイブズ」で見ることができる。



Paola Besana, "Una Strada Lunga" (1971)

ビアンカ・ボンディ
Bianca Bondi

1986 年、ヨハネスブルグ(南アフリカ)生まれ。パリ在住。
領域横断的な活動を実践するアーティストで、主に塩水を使った化学反応により、ありふれた物体を活性化あるいは崇高化する。ボンディが作品の素材とする物体は、予想される変化や、その物体が本来備えている固有性や象徴性などを基準として選定されている。視覚を超えた体験を創出し、相互の連関、はかなさ、生と死のサイクルといった概念に焦点を当てながら、「物質の生命」に目を向けさせようとするのがボンディの試みである。生態学やオカルト科学に情熱的ともいえる関心を寄せ、そのふたつを融合させることで多分野横断的で可変的な作品を生み出す。ボンディの作品では物体の「アウラ」が重要な役割を果たしている。置かれる場所と作品とが強い結びつきを示す、サイトスペシフィックで詩的な作品も多く手掛けている。

Scrying in Astral Ponds, 2022 Photo : Jean-Christophe Lett　© MAMAC, Nice / Bianca Bondi / ADAGP

AKI INOMATA
AKI INOMATA

1983 年、東京都生まれ。東京在住。
多摩美術大学 非常勤講師 / 武蔵野美術大学 非常勤講師 / デジタルハリウッド大学大学院 特任准教授 / 早稲田大学嘱託研究員。2008 年 東京藝術大学大学院 先端芸術表現専攻 修了。
生きものとの関わりから生まれるもの、あるいはその関係性を提示している。主な作品に、「やどかりに『やど』をわたしてみる」(2009-制作中)、「犬の毛を私がまとい、私の髪を犬がまとう」(2014)など。主な個展に、十和田市現代美術館（2019 年、青森)、北九州市立美術館（2019 年、福岡)、ナント美術館（2018 年、フランス)。国際展・グループ展に、「あいち 2022」(2022 年、名古屋)、「Broken Nature」ニューヨーク近代美術館（2021 年、米国)、第 22 回ミラノ・トリエンナーレ（2019 年、トリエンナーレデザイン美術館、イタリア)、タイ・ビエンナーレ 2018（クラビ）など。作品の主な収蔵先に、ニューヨーク近代美術館、南オーストラリア州立美術館、金沢２１世紀美術館、北九州市立美術館など。

昨日の空を思い出す
Thinking of the Yesterday's Sky
2022- ongoing

©AKI INOMATA

ウメッシュ・P・K
Umesh P K

バローダ（ヴァドーダラー）在住のインド人アーティスト。
人間の周囲にある自然界をインスピレーションに、すでに失われてしまった人間と自然とをつなぐ回廊をテーマとした作品を制作している。その芸術活動を支えているのは、神話や表象の歴史、精神世界などに対する関心である。ウメッシュの作品に登場する緑豊かな風景は、インド最南部、豊かな生態系を誇る西ガーツ山脈とアラビア海沿岸部に挟まれた細長いケララ州で育った幼少期の体験がベースになっている。ウメッシュ自身の言葉によると、創作活動は瞑想的なものであり、絵画史上の様々なムーブメントや各地の絵画の伝統を参照しながら、絵画をその基礎的な構成要素――色の相互作用、線や形の遊び、二次元の平面にもたらされる空間感覚など――から理解しようとする試みなのだという。
ボース・クリシュナマチャリのキュレーションによる「Lokame Tharavadu」（世界はひとつの家族／コチ＝ムジリス・ビエンナーレ財団の主催により 2021 年にアラップーザで開催）など、様々な展覧会やアート・フェスティバルに参加している。

Light flows like water, 2017 © Umesh P K

片桐功敦
Atsunobu Katagiri

1973 年、大阪府生まれ。華道家、花道みささぎ流家元。
中学卒業後に米国留学、1994 年帰国。1997 年、家元を襲名。2005 年、堺市で教室とギャラリーを兼ねた「主水書房」を開設、若手アーティストの発掘、展示や出版など多岐にわたって展開。東日本大震災後の福島を訪れ、原発周辺の地で再生への願いを伝える作品を製作、撮影した『SACRIFICE ―未来に捧ぐ、再生のいけばな』（青幻社）を 2015 年に上梓。
作品のスタイルは、小さな野草をいけたものから現代美術的なインスタレーション作品まで幅広く、いけばなが源流として持つアニミズム的な側面を掘り下げ、文化人類学的な観点から植物と人間の関係性を紐解くことを目指している。国内外での個展、ワークショップを中心に活動している。

《LIGHT OF FLOWERS》2021 年

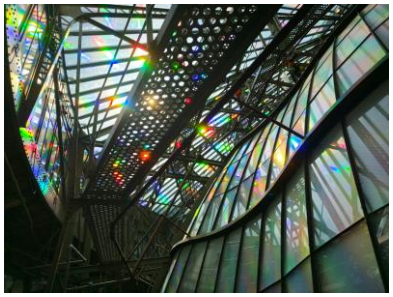
川内倫子
Rinko Kawauchi

1972 年、滋賀県生まれ。
2002 年に『うたたね』『花火』で第 27 回木村伊兵衛写真賞受賞。2023 年にソニーワールドフォトグラフィーアワードの Outstanding Contribution to Photography（特別功労賞）を受賞するなど、国際的にも高い評価を受け、国内外で数多くの展覧会を行う。
主な著作に『Illuminance』（2011 年）、『あめつち』（2013 年）、『Halo』（2017 年）など。近刊に写真集『やまなみ』『橙が実るまで』（田尻久子との共著）がある。2022～2023 年に東京オペラシティ アートギャラリーでと滋賀県立美術館で個展「川内倫子：M/E　球体の上 無限の連なり」を開催した。

川内倫子《無題》（シリーズ〈Illuminance〉より）

キムスージャ
Kimsooja

1957 年、韓国・大邱（テグ）生まれ。現在はソウル、ニューヨーク、パリを拠点として活動。コンセプチュアルなマルチメディア・アーティストとして国際的に高い評価を受けている。
サイトスペシフィックなインスタレーションを複合的に提示することによって創出されるその作品は、美意識や文化、政治、環境といった問題をテーマとしつつ、人間の条件に関する考察の場ともなっている。
近年の主な活動としては、2023 年のフレデリクスベア美術館（デンマーク）での個展「Cisternerne」や、2022 年のメス大聖堂（フランス）のステンドグラス作品の永久設置、シドニー（オーストラリア）のニューサウスウェールズ州立美術館（AGNSW）による大型インスタレーション作品の収蔵などが挙げられる。また、「ドクメンタ 14」（ドイツ、カッセル）、ヴェネツィア・ビエンナーレ（イタリア）、サンパウロ・ビエンナーレ（ブラジル）など、国際展にも多数参加出品している。



Kimsooja, To Breathe, 2023
Site-specific installation consisting of diffraction grating film.
Installation view at Galeries Lafayette Haussmann, Paris, France, 2023
Courtesy of Lafayette Group and Kimsooja Studio. Photo by Jaeho Chong

森山未來
Mirai Moriyama

1984 年、兵庫県生まれ。
5 歳から様々なジャンルのダンスを学び、15 歳で本格的に舞台デビュー。2013 年には文化庁文化交流使として、イスラエルに 1 年間滞在、Inbal Pinto & Avshalom Pollak Dance Company を拠点にヨーロッパ諸国にて活動。「関係値から立ち上がる身体的表現」を求めて、領域横断的に国内外で活動を展開している。
俳優として、これまでに日本の映画賞を多数受賞。ダンサーとして、第 10 回日本ダンスフォーラム賞受賞。東京 2020 オリンピック開会式では鎮魂の舞を踊った。
近年の活動として、パフォーマンス「FORMULA」（2022 企画構成・演出・出演）、ソロパフォーマンス『Osmosis』（2023 金沢 21 世紀美術館 企画構成・演出・出演）、企画展「なむはむだはむ展『かいき！はいせつとし』」（2023 太田市美術館・図書館／神戸・バイソンギャラリー）、アートイベント「KOBE Re: Public Art Project」（2023 キュレーション）、映画「シン・仮面ライダー」（2023）、『山女』（2023）など。2022 年 4 月より神戸市に Artist in Residence KOBE（AiRK）を設立し、運営に携わる。ポスト舞踏派。

《The Pure Present》（2022 年／演出・出演／大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ「最後の教室」にて）

太田三郎
Saburo Ota

1950 年、山形県生まれ。岡山県津山市在住。
71 年国立鶴岡工業高等専門学校機械工学科卒業。80 年より発表をはじめる。採集した種子を和紙に封入して、切手に仕立てた作品《SEED PROJECT》や、戦争後の様々な問題を取り上げた〈POST WAR〉シリーズなど郵便切手を用いた作品を作り続ける。近年の主な展覧会に、「太田三郎 ― 此処にいます」（岡山県立美術館、2019）、「MOT コレクション Journals 日々、記す vol.2」（東京都現代美術館、2021）、太田三郎展：人と災いとのありよう」（BB プラザ美術館、2022）、など。主な受賞歴に、平成 30 年度地域文化功労者文部科学大臣表彰（2018）、第 73 回岡山県文化賞（2021）など。作品は東京国立近代美術館、東京都現代美術館、国立ドレスデン版画素描館（ドイツ）、ソウル国立現代美術館（韓国）など、国内外の美術館に収蔵されている。

太田三郎《庭の情景》

スミッタ・G・S
Smitha G S

ケララ州コーリコードのマラバール地方(インド)出身。
独学のアーティストで、幼少時代に周囲にあふれていた自然のメロディーの記憶に影響を受け、動物たちや自然の緻密な美に焦点を当てた作品を制作している。スミッタの作品に描かれる人物像は脇役にすぎないことが多かったが、2010 年代になってそのスタイルに変化が起こる。ケララ州で発生したニパウイルス感染症の流行を取り上げるなど、社会的なテーマが織り込まれ、人間の脆弱さと予測不可能な動物の世界とを対比させた作品が生み出されるようになった。新型コロナウイルス感染症によるロックダウンも大きな変化をもたらし、自宅に籠っての制作の中で、幸福感に満ちた宇宙の創造に取り組むようになった。動物たちの世界を描いた初期の作品と異なり、コロナ以降の作品には人間の姿が多く描かれるようになり、そこにはマラバール地方の伝統芸能や儀式、それらと自然との関係性も取り入れられている。
スミッタの作品はボース・クリシュナマチャリのキュレーションによる 2021 年の展覧会「Lokame Tharavadu」（世界はひとつの家族）に選出された。この展覧会がスミッタのアーティストとしてのキャリアの大きな転換点となり、インド国内外の様々な芸術施設やギャラリーがスミッタの作品を評価し、購入するようになる。

Smitha G S, Untitled, Acrylic on Canvas, 2022 © Smitha G S

妹島和世
Kazuyo Sejima

1956 年、茨城県生まれ。建築家。
1987 年妹島和世建築設計事務所設立。1995 年西沢立衛とともに SANAA を設立。2010 年第 12 回ベネチアビエンナーレ国際建築展の総合ディレクターを務める。日本建築学会賞*、ベネチアビエンナーレ国際建築展金獅子賞*、プリツカー賞、芸術文化勲章オフィシエ、紫綬褒章などを受賞。主な建築作品として、金沢 21 世紀美術館*(金沢市)、Rolex ラーニングセンター*(ローザンヌ・スイス)、ルーヴル・ランス*(ランス・フランス)などがある。
*は SANAA として。

© SANAA

立石従寛
Jukan Tateisi

1986 年、アメリカ合衆国シカゴ生まれ。現代アーティスト。
仮想と現実、自然と人工など、相対する境界の分解と合成をテーマに制作を行う。主な作品に、浜辺に浜辺を積層させる「Beach on Beach」、霧に向かって私的モノローグを公共放送システムに乗せて発する「To The Fog」、森の中に鑑賞空間を持ち込む「In(to)stallation」など。また、音楽や映画、パフォーミングアーツ、フードプロダクトなど、無領域的に活動する。英国の現代アート賞「New Contemporaries 2021」入選。英国 Royal College of Art 芸術修士号修了。

Abiotope 2019 © JukanTateisi

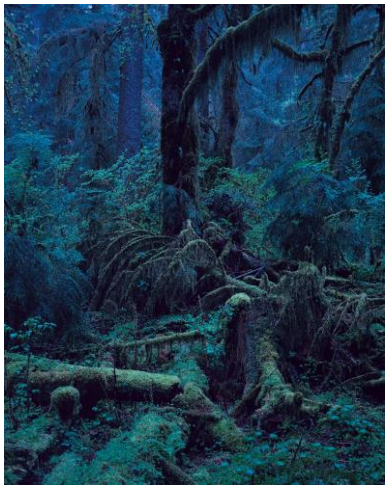
リクリット・ティラヴァニ
Rirkrit Tiravanija

1961 年、ブエノスアイレス（アルゼンチン）生まれのタイ人アーティスト。
旧来の展覧会形式を否定し、料理や食事、読書といった日常的な行為の共有を通した社会的交流を提示する活動で知られている。その作品は、芸術品の優位性を拒絶する環境を創出し、モノの利用価値や、単純な行為と共同体内の相互扶助を通じて人々を互いに結びつけることに焦点を当てるとともに、労働や技巧にまつわる既成概念の打破を試みる。現在はコロンビア大学芸術学部の教授を務め、アーティストや美術史家、キュレーターが参加するコレクティブ・プロジェクト「Utopia Station（ユートピア・ステーション）」の創設メンバーでもある。チェンマイ（タイ）近郊に拠点を置く環境教育プロジェクト「The Land Foundation（ザ・ランド・ファウンデーション）」の設立にも協力した。

untitled 1990 (pad thai)
Opening event at Paula Allen Gallery, New York, 1990.

上田義彦
Yoshihiko Ueda

1957 年、兵庫県生まれ。写真家。
多摩美術大学グラフィックデザイン学科教授。
東京 ADC 賞、ニューヨーク ADC、日本写真家協会作家賞など、国内外の様々な賞を受賞。2011 年に Gallery916 を主宰。
代表作に『Quinault』、『at Home』、『Materia』、『A Life with Camera』、『FOREST 印象と記憶 1989-2017』、『68TH STREET』、『林檎の木』、『Māter』、『いつでも夢を』（赤々舎 2023）などがある。また 2021 年公開の映画『椿の庭』は大きな反響を呼び、映画監督としての仕事も注目されている。



Yoshihiko Ueda, Quinault, No.1, 1991

アシム・ワキフ
Asim Waqif

1978 年、ハイデラバード（インド）生まれ。デリー在住。
デリーの都市計画建築学校で学び、映画やテレビ番組のアートディレクターとして働いた後、独立系の映像作品やドキュメンタリーの制作に従事。現在はアーティストとして自らの作品制作活動に取り組んでいる。
近年は建築、アート、デザインにまたがる領域横断的なプロジェクトを展開しているが、その背景には現代の都市設計や公共空間の占有／介入／利用にまつわる政策への強い意識がある。プロジェクトの一部は、社会の下層に追いやられた人々の隠れた活動空間として機能する廃墟を舞台としている。
ワキフの作品には、生態学や人類学に対する関心もしばしば織り込まれている。特に水、廃棄物、そして建築に関わる地域固有の生態系管理システムについて、ワキフは広範な研究を行ってきた。その作品の多くは、制作に手作業を伴い、多大な労力を要するように意図的に仕向けられている一方で、完成した作品そのものは一過性で、やがて崩壊することを前提としているものさえもある。彫刻からサイトスペシフィックなインスタレーション、映像、写真まで幅広く制作し、最近では伝統的な手法と新たなテクノロジーを融合させた、大規模でインタラクティブなインスタレーションも手掛けている。

Improvise
2022, site specific installation for the Kochi Muziris Biennale
Bamboo, woven pandanus leaves, ropes
Photo: Kochi Muziris Biennale

ジャコモ・ザガネッリ
Giacomo Zaganelli

1983 年、イタリア生まれ。フィレンツェとベルリンを拠点に活動。
地域コミュニティを対象とした芸術文化プロジェクトのアーティスト、キュレーター、および活動家。土地、環境、景観を通じて解釈される空間の概念の社会的及び公共的な側面をリサーチする。2010 年には、空き地が提供する可能性について市民と行政の意識を高めるため、放棄された遺産をテーマにした先駆的な研究プロジェクト「La Mappa dell'Abbandono：見捨てられた場所の地図」を立ち上げた。
2015 年以来、台湾と日本で継続的に活動している。
近年の主な活動に、個展「Superficially」（2018 MOCA 台北）、「Grand Tourismo」（2018・2019 フィレンツェ ウフィツィ美術館）がある。また、瀬戸内国際芸術祭（2019 日本）、タイランド・ビエンナーレ（2021 タイ）に参加した。

Giacomo Zaganelli, Somsed Temporary Cultural Center, Thailand Biennale 2021, Korat Thailand

6　広報

（1）方針

本芸術祭は初回開催であることから、まずは地域の方々の理解促進と芸術祭の認知度向上に注力し、地域の方々に対するプロモーションを実施するとともに、国内外への発信により幅広い層からの誘客と多様な主体の参画に結びつけることを目指します。

また、開催エリアの持つ雄大な自然や歴史ある町並み、食文化などの優れた観光資源をＰＲし、芸術祭を起点とした周遊の促進や地域観光のリピーターの増加に繋げます。

（2）取組内容

公式ウェブサイトやＳＮＳ等の媒体を活用し、アート作品や各種イベントなど芸術祭に関する情報を準備段階から発信することで、本芸術祭や地域の魅力を伝え、期待感の醸成に繋げます。

また、本芸術祭の認知拡大や参加促進を図るため、行政や報道機関、観光関係団体等の様々なルートから、各ターゲットに応じた効果的な情報発信を行うとともに、本芸術祭のイメージを広く伝えるため、統一感のあるデザインを用いた制作物によりブランディングの浸透を図ります。

①　国内向け広報

シンポジウムやトークイベント等のプレイベントを開催し、地元の方々の理解促進を図ります。また、芸術祭の認知度向上を図るため、ポスターやチラシ、新聞等のオフライン広告の活用により、芸術祭情報に触れる機会を創出するとともに、ＳＮＳを中心に開催エリアの地域情報を含めたプロモーションを行い、アートに関心の薄い層にも情報を届け、国内から多くの来場を促します。

②　海外向け広報

多言語対応の公式ウェブサイトや広報資材等を活用し、情報発信するとともに、岡山県が実施する海外観光プロモーション等と連携し、旅行者へ情報発信することなどにより、海外からの来場者の増加に取り組みます。

③　メディア向け広報

美術系や旅行系など幅広い分野のメディアへ情報提供するとともに、芸術祭の開幕に合わせ、プレスツアーを実施し、作品とともに県北部の魅力にも触れていただき、観光振興にも繋がる効果的な情報発信を行います。

7　受入環境の整備

（1）方針

本芸術祭の開催エリアは広範囲に及ぶため、エリア内周遊における来場者の利便性向上を図ることがとても重要です。来訪されたお客様に、より多くのアート作品と周辺の観光等を楽しんでいただけるよう、交通事業者と連携し、効率的かつスムーズな移動の確保に努めるほか、エリア内の宿泊施設や駐車場設備の効率的な活用も検討します。

（2）取組内容

①　二次交通

来場者の利便性向上を図るため、交通事業者等と連携して、鉄道やレンタカー、タクシー等利用促進に取り組みます。また、市町村と連携し、会場等を快適に巡ることができるよう、バスやレンタサイクル等の活用にも取り組みます。

本芸術祭の来場者は自家用車やレンタカーなど車の利用が多いと予想されるため、会場付近の駐車場の効率的な活用を行います。

②　開催エリア内周遊促進策

本芸術祭の広域なエリアにあるアート作品設置会場を効率よく鑑賞できる周遊バス等を整備するほか、アート作品と合わせて周辺の観光地や文化施設等を巡る旅行商品の造成を事業者に働きかけます。

また、来場者のニーズや交通手段に合わせて芸術祭を楽しんでいただけるよう、来場者にわかりやすい周遊モデルコースを提案します。

③　宿泊・滞在対策

観光関係団体等と連携し、来場者へ宿泊や飲食の情報を提供し、エリア内の周遊、滞在を促します。

また、宿泊を伴う滞在型の旅行商品の造成を事業者に働きかけます。

④　多言語対応

海外からの来場者向けに、広報媒体や会場案内等の多言語対応に取り組みます。

⑤　バリアフリー対応

会場内における車いす利用者等への対応に関するマニュアルを作成し、これに沿った対応を行います。

8　来場者への情報提供

（1）方針

本芸術祭では、来場者の利便性や満足度の向上を図るため、移動手段の確保、地域の宿泊施設や飲食店等との連携に努めることとしていますが、それらの情報が来場者にわかりやすく伝わるよう、情報提供体制の充実を図ります。

（2）取組内容

①　公式ウェブサイト

アート作品や各種イベントなど芸術祭に関する情報のほか、来場者が事前に旅行計画を立てる段階で必要な情報を効率的に得られるよう、エリア内の周遊モデルコースや二次交通などの役立つ情報を公式ウェブサイトに集約し、発信します。

②　紙媒体

展覧会に関する情報や観光地等の情報を掲載したガイドブックやマップ等を作成し、来場者に情報提供します。

③　インフォメーション・センター

本芸術祭では、アート作品設置会場間の距離が離れているため、会場のある市町ごとにインフォメーション・センターの設置を検討します。

インフォメーション・センターでは、展覧会に関する情報の提供を行うとともに、周辺の観光地等の情報や、二次交通など、来場者が周遊するために必要な情報の提供を行います。また、鑑賞券やオフィシャルグッズを販売するなど、来場者の利便性や満足度を向上させるためのサービスを提供します。

9　観光・文化関連イベント

（1）方針

観光振興及び文化振興の両面から地域振興を図るため、市町村や観光団体、文化団体とも連携し、各種イベントを実施します。

観光振興については、開催エリアの観光資源を活用したイベントを開催し、来場者の周遊の促進を図ります。

文化振興については、芸術祭と関連したイベントの開催や、来場者の文化施設への誘客を図ります。

（2）取組内容

芸術祭の開催効果を最大限発揮できるよう、開催エリア内で行われる観光・文化関連イベントと連携し、さらなる誘客や地域の活性化に繋げます。

①　公式事業

本芸術祭の開催エリアの特産品を使用した特製パフェを開発・レシピ化し、開催エリア内のカフェ等において広く展開するほか、各種イベントを実施します。

②　連携事業

ア　ＰＩＣＫ　ＵＰ　ＰＲＯＧＲＡＭ

芸術祭の開催趣旨やコンセプトに沿った誘客促進や地域の魅力発信に繋がるイベントを「ＰＩＣＫ　ＵＰ　ＰＲＯＧＲＡＭ」として位置づけ、芸術祭とともに盛り上げていきます。

イ　ＦＲＩＥＮＤＳ　ＰＲＯＧＲＡＭ

芸術祭の開催趣旨に賛同し、相互に連携することで相乗効果が期待できるイベントを広く募集し、「ＦＲＩＥＮＤＳ　ＰＲＯＧＲＡＭ」として位置づけ、情報発信を行います。

ウ　特別連携企画

芸術祭と特に親和性が高い文化芸術事業と連携し、それにより生まれる相乗効果により、県全体の文化芸術活動の活性化と交流人口の増加を図ります。

１０　地域交流・学校連携

（１）方針

芸術祭の開催を契機に、地域住民が、住民同士、あるいはアーティストや来場者などと交流できるさまざまな機会を生み出すことにより、地域の活性化を促進させます。

また、芸術祭の開催効果を地域に波及させるため、教育との連携を図ります。

（２）取組内容

①　地域交流

地域住民とアーティストとの交流を図るため、作品の制作過程における地域住民との交流を重視したリレーショナル・アートの手法を用いて作品を展開するとともに、アーティスト・イン・レジデンスなど交流型のイベントも実施します。

また、地域住民や地元企業、学校、地域づくりに関わる人々などに、芸術祭に参加していただくことにより、アートを活用した地域づくりに繋げていきます。

②　学校連携

学校と連携し、校外学習として子どもたちが芸術祭を訪れ、鑑賞することにより、次世代を担う子どもたちが豊かな感性や創造性を育む場として、芸術祭の開催効果を教育に還元します。

また、県内の大学を中心に、インターンシップや履修科目の一環として、芸術祭のさまざまな場面において、学生の参加を働きかけていきます。

１１　サポートスタッフ

（１）方針

本芸術祭の成功には、多くのサポートスタッフの協力が不可欠です。会期中の運営サポートのみならず、来場者がエリア全体の周遊を楽しめるよう、コンシェルジュとしての役割も期待されます。

これらのサポートスタッフを、関係団体と連携しつつ、幅広い年代から募集するとともに、人材の育成にも取り組みます。

（２）取組内容

①　活動内容

サポートスタッフは、来場者の受付、会場や作品の案内といった会場運営サポートに加え、周辺観光施設やアクセス方法の案内といった周遊サポートも行います。その他にも、作品制作の補助や、来場者への対話型鑑賞など、多岐にわたる活動を行います。

こうした経験をすることにより、サポートスタッフが、社会参加意欲の充足を感じ、やがては芸術祭と地域のファンとなっていただけるよう目指します。

また、これらの活動を通じてアーティストや地域づくりに関わる人々と交流することにより、アートによる地域活性化に取り組む人材の育成にも繋げていきます。

②　募集

地域住民や地元企業、学校など、地域と密接な関わりを持つ人々がサポートスタッフとして芸術祭に関わり、来場者やアーティストと交流することが、地域づくりの観点からも重要です。そのためにも、地元町内会や地元企業、学校等に対し、サポートスタッフへの積極的な参加を働きかけます。また、ウェブサイトやＳＮＳも活用し、県内のみならず県外からの参加も募ります。

③　研修

サポートスタッフの活動内容は多岐にわたるため、活動内容に応じた適切な研修プログラムを作成し、研修を実施します。

１２　企業協力・協賛

（１）方針

本芸術祭の開催趣旨に賛同する企業の協力・協賛を得ることで、芸術祭の成功と強固なパートナーシップの構築に繋げます。

（２）取組内容

本芸術祭の開催趣旨に賛同する県内外の企業に対し、積極的に協力・協賛を呼びかけ、より多くの企業とのパートナーシップ構築を目指します。また、各企業独自の事業分野における様々な協力を得ることで、他の芸術祭との差別化や開催趣旨の多角的な実現を図ります。

また、社会貢献活動を積極的に推進している企業に対し、企業サポーターとしての参加を働きかけ、企業と地域のつながりの創出を図ります。

１３　鑑賞券・オフィシャルグッズの展開

（１）方針

来場者の利便性や販売管理の効率性を考慮した鑑賞券制度を検討します。また、本芸術祭のみならず、地域の魅力も理解できるよう、ロゴマークや地域の特色を生かした魅力的なオフィシャルグッズの開発も検討します。

（２）取組内容

①　鑑賞券

アート作品を鑑賞するために必要な鑑賞券として、次の２種を販売し、プレイガイドや旅行会社等を通じて販売網を整備していきます。

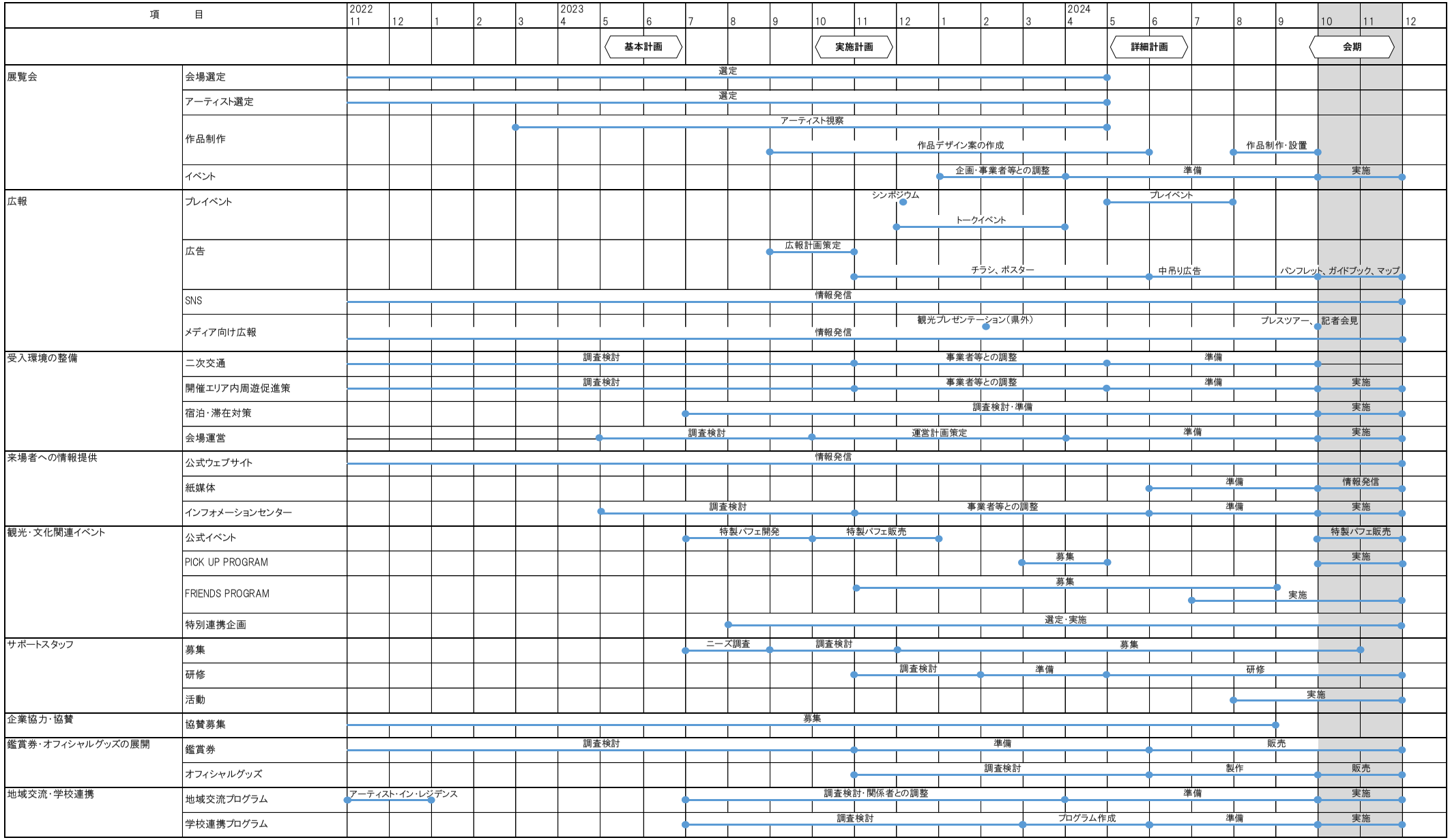
（鑑賞券の価格）

券種	区分	当日券	前売券
パスポート	一般	3,000 円	2,500 円
	大学生、専門学生	2,000 円	1,500 円
	高校生以下、障がい者	無料	無料
単館鑑賞券	未定	未定	未定

②　オフィシャルグッズ

ロゴマークや地域の特色を生かした魅力的なオフィシャルグッズを開発し、インフォメーション・センターなどで販売します。

１４　スケジュール概要


項　目
2022 11
12
1
2
3
2023 4
5
6
7
8
9
10
11
12
1
2
3
2024 4
5
6
7
8
9
10
11
12
基本計画
実施計画
詳細計画
会期
展覧会
会場選定
選定
アーティスト選定
選定
作品制作
アーティスト視察
作品デザイン案の作成
作品制作・設置
イベント
企画・事業者等との調整
準備
実施
広報
プレイベント
シンポジウム
プレイベント
トークイベント
広告
広報計画策定
チラシ、ポスター
中吊り広告
パンフレット、ガイドブック、マップ
SNS
情報発信
メディア向け広報
観光プレゼンテーション（県外）
プレスツアー、
記者会見
情報発信
受入環境の整備
二次交通
調査検討
事業者等との調整
準備
開催エリア内周遊促進策
調査検討
事業者等との調整
準備
実施
宿泊・滞在対策
調査検討・準備
実施
会場運営
調査検討
運営計画策定
準備
実施
来場者への情報提供
公式ウェブサイト
情報発信
紙媒体
準備
情報発信
インフォメーションセンター
調査検討
事業者等との調整
準備
実施
観光・文化関連イベント
公式イベント
特製パフェ開発
特製パフェ販売
特製パフェ販売
PICK UP PROGRAM
募集
実施
FRIENDS PROGRAM
募集
実施
特別連携企画
選定・実施
サポートスタッフ
募集
ニーズ調査
調査検討
募集
研修
調査検討
準備
研修
活動
実施
企業協力・協賛
協賛募集
募集
鑑賞券・オフィシャルグッズの展開
鑑賞券
調査検討
準備
販売
オフィシャルグッズ
調査検討
製作
販売
地域交流・学校連携
地域交流プログラム
アーティスト・イン・レジデンス
調査検討・関係者との調整
準備
実施
学校連携プログラム
調査検討
プログラム作成
準備
実施